

平成 22 年度

病害虫発生予報第 3 号

平成 22 年 6 月 24 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.jp/boiyosyo/>

目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	8
4. 予察項目の見方	14
5. 今月のトピックス（トマトサビダニについて）	15
6. 気象のデータ	16
7. おしらせ	18

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、葉いもちの発生量は**やや多**、穂いもちの発生時期は**やや遅**、発生量は**やや多**と予想されますので、早期発見と早期防除を心がけてください。紋枯病の発生量は**やや遅**、発生量は**平年並**、白葉枯病、イネクロカメムシの発生量は**平年並**と予想されます。斑点米カメムシ類、ツマグロヨコバイの発生量は**やや少**と予想されます。セジロウンカの発生時期は**やや早**、発生量は**平年並**と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、黒点病、かいよう病（中晩柑）の発生量は**やや多**と予想されます、いずれも連続した降雨により発生が助長されますので、適期に薬剤防除を実施してください。そうか病、かいよう病（温州みかん）の発生量は**平年並**、ミカンハダニの発生量は**やや少**、チャノキイロアザミウマの発生量は**少**と予想されます。

ナシでは、黒星病の発生量は**やや多**と予想されますので、今後の降雨に注意し、散布間隔が開きすぎないように適期に薬剤防除を実施してください。ハダニ類の発生量は**平年並**と予想されます。

ブドウでは、べと病の発生量は**平年並**と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は**多**と予想されます。カンキツ、ナシ、カキ等への飛来に注意し、確認したら防除を実施してください。

3) 茶

チャでは、炭疽病の発生量は**平年並**と予想されます。カンザワハダニ、チャノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、クワシロカイガラムシ、チャノコカクモンハマキの発生量は**やや少**と考えます。

4) 野菜

イチゴでは、うどんこ病、炭疽病、ハダニ類の発生量は**平年並**と予想されるので、苗の下葉の整理後、病害虫の発生密度の低いうちに予防的に防除を実施してください。

ネギでは、ネギコガの発生量は**平年並**と予想されます。

2. 作物別の状況

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生病消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	葉いもち	—	やや多	中	普通					1) 6月第4週以降、初発の病斑が現れ始めると予想されます(病害虫防除技術情報第4号・6月17日発表)。早期発見、早期防除に努めましょう。 2) 前年、いもち病の発生が多かった地域では、本圃とともに周辺圃場での発生状況にも注意してください。 3) 補植用置き苗は発生源となるので、速やかに取り除いてください。
	穂いもち	やや遅	やや多	中	普通					1) 葉いもちが上位葉に多く発生すると、穂いもちへ移行しやすくなります。 2) 薬剤防除は穂ばらみ期から穂揃い期に、予防的に行ってください。
	紋枯病	やや遅	平年並	小	普通					1) 幼穂形成期頃(穂肥時期)から発生が目立つようになります。 2) 水面に近い茎から感染しますが、薬剤防除によって病斑の上位葉への進展を阻止してください。
	白葉枯病	—	平年並	小	低					1) 浸水や冠水、台風によって感染や発病が助長されます。 2) 「みえのゆめ」は抵抗性が弱い品種なので注意してください。
	斑点米カメムシ類	—	やや少	小	普通					1) 水田周辺のイネ科雑草の除草に努めましょう。 2) 本田粒剤で防除する場合は、出穂期に散布してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						6月		7月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
イネ	イネクロカメムシ	—	平年並	小	普通					1) 今の時期はイネの葉先が白く縮れる症状が現れます。 2) 近年、被害で減収する圃場が増えていますので、発生が多い圃場では注意が必要です。 3) 日中は株元に潜んでいるので、夕方や曇天の日に薬剤散布を行うと効果的です。
	ツマグロヨコバイ	—	やや少	中	低					1) 当面、防除が必要な密度には達しないと思われます。
	セジロウンカ	やや早	平年並	小	低					1) 例年、被害の発生はごく局所的であるため、多飛来が認められる場合は、病害虫防除技術情報等で臨時発表します。
カンキツ	そうか病	—	平年並	小	普通					1) 常発園、幼木園、高接ぎ更新園の温州ミカンでは、発生に注意してください。 2) 果実への感染は梅雨末期頃までといわれています。
	黒点病	—	やや多	中	普通					1) 樹勢の衰弱により、枯枝が増加している樹では、枯枝の除去を実施してください。 2) 薬剤散布は前回の散布後に積算降水量が200~300mmに達した時を目安に実施してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						6月		7月		
						下旬	中旬	下旬	中旬	
カンキツ	かいよう病	—	温州 平年並 中晩柑 やや多	小 中	低 普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 発病枝葉、果実は、見つけ次第剪除し処分してください。 2) 高接樹や幼木では、ミカンハモグリガの防除を実施してください。 3) 中晩柑類では、梅雨期頃から10月中下旬頃まで、果実への感染が起こります。
	ミカンハダニ	—	やや少	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 1葉当たりの雌成虫発生数が0.5～1.0頭程度を目安に防除してください。 2) 薬剤は葉裏にもかかるように散布してください。 3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。
	チャノキイロアザミウマ	—	少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 寄生果率10%を目安に防除してください。 2) 7月になり果実肥大が進むと果頂部で加害します。 3) 圃場周辺のイヌマキ・サングジュ・チャ等が発生源となります。
ナシ	黒星病	—	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 発病果及び発病葉は除去して、圃場外に持ち出し処分してください。 2) 発病が確認される圃場では、すみやかに防除を計画してください。 3) 薬剤散布を実施するときは薬剤をていねいに散布し、同一系統薬剤の連用を避けてください。
	ハダニ類	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 1葉当たり寄生数が1～2頭で防除を実施してください。 2) 7～8月に密度が高くなります。徒長枝での発生にも注意してください。 3) 同系統薬剤の連用は避けてください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
ブドウ	べと病	—	平年並	小	普通					1) 降雨が連続すると、病徴が急速に進展するので、葉裏に病斑を認めたら直ちに薬剤を散布してください。 2) 降雨の合間に防除を計画してください。 3) 被害葉及び被害落葉は感染源となるので圃場外に持ち出して処分してください。 4) 同一系統薬剤の連用を避けてください。
果樹共通	カメムシ類	—	多	大	高					1) 局所的に密度が高まる時があります。カンキツ、ナシ（無袋栽培）カキ等では、まとまった飛来を確認したら、防除を実施してください。 2) 中山間地や昨年多発した地域では、注意が必要です。 3) 地域で発生量が多い場合は、一斉防除を検討してください。
チャ	炭疽病	—	平年並	中	普通					1) 今年の二番摘採が遅れている圃場では、発病時期に重なり被害が大きくなります。 2) 胞子は雨滴で広がるため降雨が多いと多発します。
	カンザワハダニ	—	やや少	小	普通					1) 地域や茶園によって発生の差が大きく異なります。 2) 多発すると防除が困難なので、初期の防除が重要です。 3) 世代交代が早く、薬剤に対する抵抗性を獲得しやすいため、同一系統の薬剤の連用を避けてください。
	チャノホソガ	—	やや少	小	普通					1) 幼虫の孵化直後が防除適期です。脱皮阻害剤を使用する場合は、少し早めの卵期が防除適期です。 2) 一番茶摘採後、深刈り更新を行なった圃場では、巻葉や次世代の発生に注意してください。
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	やや少	小	普通					1) 三番茶の生育期は発生しやすい時期なので、必要に応じて2葉期までに防除してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
チャ	チャノキイロアザミウマ	—	やや少	中	普通					1) 三番茶期は発生および被害が多いので、必要に応じて2葉期までに防除してください。
	クワシロカイガラムシ	—	やや少	小	普通					1) 第2世代幼虫の発生期は7月下旬頃です。 2) 多発圃場では深刈り更新と防除を組み合わせると効果的です。
	チャノコカクモンハマキ	—	やや少	小	低					1) 二番茶後に刈り落としを行うところでは防除の必要はありません。 2) 一番茶摘採後に深刈り更新を行なった圃場では、発生に注意して下さい。
イチゴ	うどんこ病	—	平年並	中	普通					1) 薬剤散布は、葉かき後の予防に重点をおきますが、発病を認めたときは、集中的に散布して感染の拡大を防いでください。 2) 葉裏から発生しやすいので、葉液が葉裏にかかるよう丁寧に散布します。
	炭疽病	—	平年並	中	普通					1) 病原菌の発育適温は28℃前後で、高温を好みます。 2) これからの高温期にかけて、葉かき後の定期的な防除と、降雨後の防除を徹底してください。 3) 薬剤散布は、株元まで十分かかるよう、畝やベンチの両側からも散布してください。 4) 灌水は、水滴が跳ね返り茎葉に当たらないようにしてください(チューブ灌水かやさしく丁寧な手灌水)。また、底面灌水は発病抑制に効果的です。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項	
						6月		7月			
						平年比	平年比	程度	平年比		下旬
イチゴ	ハダニ類	—	平年並	小	普通	雌ダニ密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 親株床、育苗床周辺の環境を整理し雑草等の管理に注意してください。 2) 葉かき後の定期防除時に、葉裏を中心に丁寧に薬剤を散布してください。 3) 葉かき後の残渣は圃場外で確実に処分してください。 4) 抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤や同一系統薬剤の連用は避けてください。
ネギ	ネギコガ	—	平年並	小	普通	成虫密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 幼虫が葉の内部に潜るので、潜入防止のため発生の初期から防除してください。 2) 6月以降ネギアザミウマ等微小害虫の被害が拡大しますので、防除効果の広い薬剤による、効率のよい防除を心がけてください。

3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	葉いもち	—	やや多	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報によると、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温は低くない予想（+） 2) プラストム（6月22日現在）によると、感染好適条件は6月15日に全県的に出現、また6月21日に中南勢で広域的に出現（+） 3) 巡回調査圃場（6月第1～2週）では、本田における発生圃場率0%（平年0.2%）と平年並に少ない傾向（±） 4) 防除員調査圃場（6月12,13日）では、置き苗での発生を確認（+） 5) 一般圃場では、発生量は無（-） 6) 巡回調査圃場（昨年8月）では、穂いもちの発病穂率0.15%（5年平均0.04%）とやや多なので、感染源となる罹病種子の割合がやや多の予想（+） <p>考察：現在の発生量は平年並に少ない状況ですが、プラスタムによる判定結果と今後の気象条件を考慮して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	穂いもち	やや遅	やや多	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報によると、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温は低くない予想（+） 2) 水稻生育予測システム（4月25日移植コシヒカリ、6月14日現在）によると、予想出穂期は7月24日頃と、平年に比べ1～2日程度遅い見込み（発生時期±） 3) 一般圃場では、移植時期は平年並～やや遅い状況（発生時期+） 4) 葉いもち発生量はやや多の予想（+） <p>考察：水稻の生育状況から発生時期はやや遅、今後の気象条件を考慮して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	紋枯病	やや遅	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想（±） 2) 農業研究所作況試験田（コシヒカリ 4/26 移植）では、葉齢の進展はやや遅、茎数はやや多の傾向（発生時期+、発生量+） 3) 巡回調査圃場（昨年8月）では、発病株率6.7%（平年13.6%）と少発生であったため、越冬菌核量は少の予想（-） 4) 一般圃場では、葉齢の進展の遅れにより、分けつの発生がやや遅い状況（+） <p>考察：水稻葉齢の進展状況から、発生時期はやや遅と考えます。そのために感染の機会が増えるものの、感染源となる越冬菌核量は少ないと予想されるため、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	白葉枯病	—	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 県内の広範囲で5月23日に日降水量100mm以上の降雨を記録（+） <p>考察：圃場によっては大雨に伴う冠水があったと考えられますが、激しい風雨を伴う天候ではなかったため、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	斑点米カメムシ類	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～6月第4半旬）では、誘殺数はアカヒゲホソミドリカスミカメ 108 頭（平年 20.5 頭）と多、アカスジカスミカメ 35 頭（平年 7.9 頭）と多、その他中型種は未飛来で平年並（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（6月第1～2週）では、畦畔イネ科雑草すくい取りによる、斑点米カメムシ類成幼虫の発生地点率はホソハリカメムシで 8.1 %（平年 10.3 %）と少、クモヘリカメムシで 0 %（平年 0.2 %）と平年並に少、シラホシカメムシ類で 3.1 %（平年 7.7 %）と少、アカスジカスミカメで 31.3 %（平年 14.3 %）と多。同調査における成幼虫数はホソハリカメムシで 0.1 頭（平年 1.3 頭）と少、クモヘリカメムシで 0 頭（平年 0.009 頭）と平年並に少、シラホシカメムシ類で 0.03 頭（平年 1.1 頭）と少、アカスジカスミカメで 1.0 頭（平年 3.0 頭）と少（-）</p> <p>考察： 予察灯および巡回調査結果から、カスミカメ類の発生量はやや多の傾向ですが、主要な加害種である中型種（ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ類）の発生量を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	イネクロカメムシ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～6月第4半旬）では、誘殺数は水田位置 22 頭（平年 7.5 頭）と多、畑位置 193 頭（平年 151.6 頭）と多（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（6月第1～2週）では、発生圃場率 4.7 %（平年 5.4 %）とやや少、25 株当たり成虫数 0.01 頭（6 年平均 0.07 頭）と少ない傾向（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～少（概して少）（-）</p> <p>考察： 現在の発生量はやや少の状況ですが、予察灯を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（4月第1半旬～6月第4半旬）では、誘殺数は松阪市 0 頭（平年 4.1 頭）、伊賀市 1 頭（平年 0.1 頭）、紀北町 0 頭（平年 0.5 頭）、御浜町 0 頭（平年 0.4 頭）と概してやや少の傾向（-）</p> <p>2) 巡回調査圃場（6月第1～2週）では、払い落とし成虫数 0.01 頭（平年 0.09 頭）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並に少ない傾向（±）</p> <p>考察： 予察灯および巡回調査結果を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	セジロウンカ	やや早	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯では、松阪市で 6月 20 に 1 頭、伊賀市で 6月 18 日に 1 頭飛来（松阪市・平年初飛来 7月 6 日）（発生時期-）</p> <p>2) 巡回調査圃場（6月第1～2週）では、払い落とし成虫数 0 頭（平年 0.02 頭）と平年並に少ない傾向（±）</p> <p>3) ウンカ飛来状況（JPP-NET）によると、九州では 6月中旬まで多飛来は無（-）</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並に少ない傾向（±）</p> <p>考察： これまでの飛来状況から、発生時期はやや早、現在の発生量は少と考えますが、今後の増加を考慮して、発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	そうか病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月18日発表)によると、前半は気温が高く(+)、平年同様曇りや雨の日が多い(±)予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、発病葉率42.0%(平年49.3%)とやや少、発病果率54.2%(平年44.9%)と多 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第1~2週)では、春葉発病度は0.1(平年0.4)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 現状の発生は平年並であり、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	黒点病	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月18日発表)によると、平年同様曇りや雨の日が多く、気温は低くない予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、果実発病度5.7(平年4.3)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第1~2週)では、春葉発病度は0.4(平年0.1)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>5) 感染源となる枯れ枝は平年並 (±)</p> <p>考察: 現状の発生量がやや多と思われる、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	かいよう病	—	温州 平年並 中晩柑 やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月18日発表)によると、平年同様曇りや雨の日が多く(±)、気温は低くない(+)+予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃では、果実での初発は6月4日(平年6月11日)とやや早 (+)</p> <p>3) 県予察圃(6月中旬)では、発病葉率9.2%(平年9.8%)平年並、発病果率0.8%(平年1.4%)とやや少 (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第1~2週)では、新葉における発病度は温州みかんでは認められず(±)、中晩柑では1.2(平年0.5)と多 (+)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 温州みかんでは、現状の発生は平年並と少なく、今後の増加を考慮しても予想発生量は平年並と考えます。 中晩柑類では、新葉での発生が多く、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	ミカンハダニ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月18日発表)によると、平年同様曇りや雨の日が多く(±)、気温は低くない(+)+予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、100葉当寄生虫数は、無防除区で1.1頭(平年24.1頭)と少、防除区で5.6頭(平年11.3頭)とやや少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第1~2週)では、新葉における平均寄生葉率は15.4%(平年8.7%)と多、1葉当平均寄生虫数は0.75頭(平年0.49頭)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察: 現状の発生量は少と考え、今後の増加を考慮しても、予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	—	少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃（6月上旬）では、粘着トラップへの誘殺数は0.1頭（平年0.6頭）と少（－）</p> <p>2) 県予察圃（6月中旬）では、100果当たり寄生虫数は0頭（平年1.4頭）と少（－）</p> <p>3) 巡回調査圃場（6月第1～2週）では、被害果は未確認（±）</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少（－）</p> <p>考察： 現状の発生量は少と考え、増加要因も無く、予想発生量は少と考えます。</p>
ナシ	黒星病	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（6月18日発表）によると、平年同様曇りや雨の日が多く（±）、気温は低くない（－）予想（－）</p> <p>2) 巡回調査圃場（6月第1～2週）では、平均発病葉率0.9%（平年0.6%）と多（＋）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並（±）</p> <p>考察： 巡回調査圃場の結果を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	ハダニ類	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（6月18日発表）によると、平年同様曇りや雨の日が多く（±）、気温は低くない（＋）予想（＋）</p> <p>2) 巡回調査圃場（6月第1～2週）では、平均寄生葉率は0.2%（平年1.3%）とやや少、1葉当平均寄生虫数は0.002頭（8か年平均0.065頭）と少の傾向（－）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並（±）</p> <p>考察： 現状の発生は平年並に少なく、大きな増減の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
ブドウ	べと病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（6月18日発表）によると、平年同様曇りや雨の日が多く（±）、気温は低くない（－）予想（－）</p> <p>2) 巡回調査圃場（6月第1～2週）では、平均発病葉率は0.50%（0.04%）と多（＋）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少（－）</p> <p>考察： 現状は一部圃場で発生が見られるが、今後の気象要因を考慮して予想発生量は平年並と考えます。</p>
果樹共通	カメムシ類	—	多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（御浜町：6月1日～6月10日）では、誘殺数はチャバネアオカメムシ2934頭（平年136頭）と多、ツヤアオカメムシ368頭（平年50頭）と多（＋）</p> <p>2) 予察灯（畑・松阪市：5月16日～6月15日）では、誘殺数はチャバネアオカメムシ1610頭（平年315頭）と多、ツヤアオカメムシ243頭（平年74頭）と多、クサギカメムシ4頭（平年2頭）とやや多（＋）</p> <p>3) フェロモントラップ（5月25日～6月15日）では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、山地（津市白山町川口）で342頭（平年257頭）とやや多、中間地（津市白山町二本木）で982頭（平年393頭）と多、平坦地（松阪市嬉野川北町）で178頭（平年65頭）と多（＋）</p> <p>4) 巡回調査圃場（6月第1～2週）では、圃場への飛来を確認。カンキツで0.38頭（5か年平均0.02頭）（＋）</p> <p>5) 一般圃場では、発生量はやや多～多（概して多）（＋）</p> <p>考察： 現状の発生量が多く、予想発生量は多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	炭疽病	—	平年並0	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月18日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温は低くない予想(±)</p> <p>2) 二番茶生育期である6月13日から梅雨入り(+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第1週)では、発病葉数は0.2葉/m²(平年0.6葉/m²)と少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並(±)</p> <p>考察：現状はやや少と考えられますが、収穫の遅れを考慮して今後の発生は平年並と考えます。</p>
	カンザワハダニ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月18日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多く(±)、気温は低くない(+)+予想(+)</p> <p>2) 県予察圃(5月中旬~6月上旬)では、寄生葉率は0%(平年19.2%)、寄生頭数0頭/葉(平年1.3頭/葉)と少(-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第1週)では、新葉寄生葉率1.0%(平年5.3%)、寄生頭数0.02頭/葉(平年0.72頭/葉)と少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、やや少(-)</p> <p>考察：現状はやや少と考えられますが、気象要因を考慮して予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノホソガ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃(5月第6半旬~6月第3半旬)では、フェロモントラップ誘殺数は2,537頭(平年4,251頭)と少(-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第1週)では、巻葉数は0.04葉/m²(平年0.67葉/m²)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は平年並(±)</p> <p>考察：現状はやや少と考えられますが、大きな増減の要因はないので予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃(5月第6半旬~6月第3半旬)では、吸引粘着トラップ捕殺数は2.8頭(平年8.5頭)と少(-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第1週)では、たたき落とし虫数は0.5頭(平年1.7頭)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生はやや少(-)</p> <p>考察：現状はやや少と考えられますが、大きな増減の要因はないので予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃(5月第6半旬~第3半旬)では、粘着吸引トラップ捕殺数は488頭(平年2,075頭)と少(-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第1週)では、たたき落とし虫数は4.2頭(平年13.9頭)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生はやや少(-)</p> <p>考察：現状はやや少と考えられますが、大きな増減の要因はないので予想発生量はやや少と考えます。</p>
	クワシロカイガラムシ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(6月第1週)では、雄繭寄生株率は1.7%(平年17.2%)と少(-)</p> <p>2) 一般圃場では、発生はやや少(-)</p> <p>考察：現状はやや少と考えられますが、大きな増減の要因はないので予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノコカクモン ハマキ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃 (5月第6半旬～6月第3半旬) では、フェロモントラップ誘殺数は8.7頭 (平年34.9頭) と少 (—)</p> <p>2) 巡回調査圃場 (6月第1週) では、巻葉数は0.04葉/m² (平年0.53葉/m²) と少 (—)</p> <p>3) 一般圃場では、発生はやや少 (—)</p> <p>考察： 現状はやや少と考えられますが、大きな増減の要因はないので予想発生量はやや少と考えます。</p>
イチゴ	うどんこ病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報 (6月18日発表) によると、平年と同様に曇りや雨の日が多く(±)、気温は低くない(—)予想 (—)</p> <p>2) 巡回調査圃場 (6月第1～2週) では、発病株率13.8% (6年平均12.3%) と平年並の傾向 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は平年並～やや多 (概して平年並) (±)</p> <p>考察： 大きな増減の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	炭疽病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報 (6月18日発表) によると、平年と同様に曇りや雨の日が多く(±)、気温は低くない(+)予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場 (6月第1～2週) では、発病株率0% (平年0.02%) と平年並の傾向 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は少～平年並 (概してやや少) (—)</p> <p>考察： 現在の発生量はやや少ですが、気象要因を考慮して、平年並と考えます。</p>
	ハダニ類	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報 (6月18日発表) によると、平年と同様に曇りや雨の日が多く(±)、気温は低くない(+)予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場 (6月第1～2週) では、寄生株率10.2% (6年平均6.1%) とやや多の傾向 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は少～平年並 (概してやや少) (—)</p> <p>考察： 一般圃場での発生量はやや少ですが、気象要因を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
ネギ	ネギコガ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場 (6月第1～2週) では、被害葉率0.5% (平年0.3%) とやや多 (+)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ (5月5半旬～6月4半旬) では、誘殺数は375頭 (平年175頭) と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は少 (—)</p> <p>考察： 現在の発生量は平年並と考えられ、大きな増減の要因はないので予想発生量は平年並と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期（平年比）： 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数		-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6	
評価		早	やや早		平年並				やや遅			遅			

発生量（平年比）： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		やや多	多

発生量（程度）： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率（平年比）： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていればいいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

（±）：平年並の要因

（+）：発生量増加または発生時期遅延の要因

（-）：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス 「トマトサビダニについて」

1 トマトサビダニとは

トマトサビダニはフシダニ科に属し、雌成虫の体長が0.15~0.20mmと非常に小さい害虫です(写真1)。ダニ自体を肉眼で見つけるのは困難なため、被害が大きくなるまで発生に気づかないことがあります。



写真1. トマトサビダニ

(独)野菜茶業研究所・北村登史雄氏原図

2 トマト・ミニトマトでの被害について

その名のとおりトマトやミニトマトが好適な餌植物で、大きな被害を与えます。被害は以下のような特徴があります。

- ・葉が黄化・褐変し、症状は徐々に上部へ広がっていきます。
- ・被害が進むと初期の加害葉は枯れ上がり、茎も褐変します(写真2)。
- ・多発すると果実も加害され、褐変してサメ肌状となり、肥大しなくなってしまう(写真3)。

その他の植物では、ジャガイモ、ナス、パチュニア、イヌホウズキなどでも増殖しますが、被害はほとんどありません。



写真2. 葉や茎の褐変被害

(中央農業改良普及センター・山田信二氏原図)

3 驚異的な増殖力！

増殖力が非常に高いため、短期間で高密度になります。最適温度は25℃で、約5日

で卵から成虫まで発育します。また、産卵数は乾燥条件で多くなる(相対湿度30%が最適)ので、施設栽培では爆発的に増殖し、みるみるうちに被害が広がってしまうことがあります。



写真3. 果実の被害

(中央農業改良普及センター・山田信二氏原図)

4 防除のポイント

増殖力が高いので、とりわけ「早期発見・早期防除」が重要な害虫です。しかし、肉眼でダニを確認困難なため、何らかの病害と勘違いしてしまうことがあります。トマトサビダニによる被害かどうか、ルーペ等を使って以下のように確認してください。

- ・疑わしい症状の葉などを観察すると、トマトサビダニが原因であれば淡黄色～橙色の小さなダニがたくさん見つかります(写真4)。
- ・葉が褐変している場合は、その少し上位の葉に多数寄生しています。
- ・圃場内での初発場所は不規則なので、トマトをよく観察して被害症状を目安にしてください。

一度発生した圃場では、その後も発生が続く傾向があるので、圃場のどこかで生きながらえていると思われますが、詳しい生態はわかりません。なお、防除薬剤は登録内容をよく確認して使用してください。

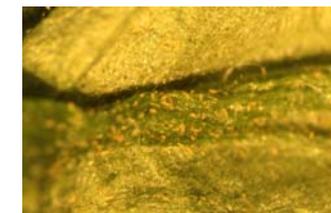


写真4. 葉に多数寄生しているトマトサビダニ

6. 気象のデータ

東海地方1か月予報 (平成22年6月18日 名古屋地方気象台発表)

東海地方の向こう1か月は、平年と同様に梅雨前線や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

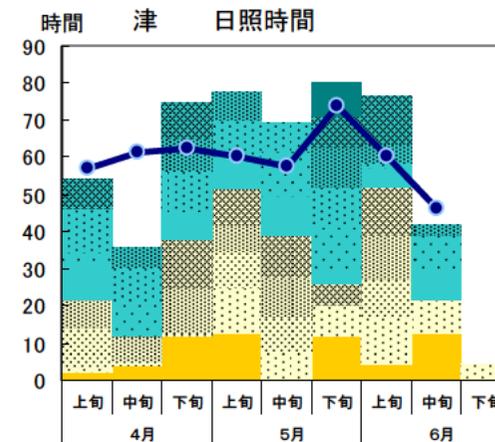
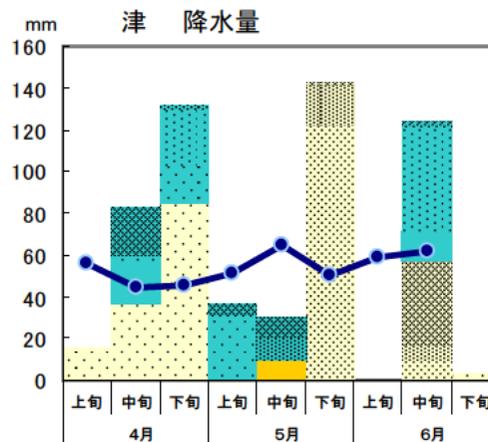
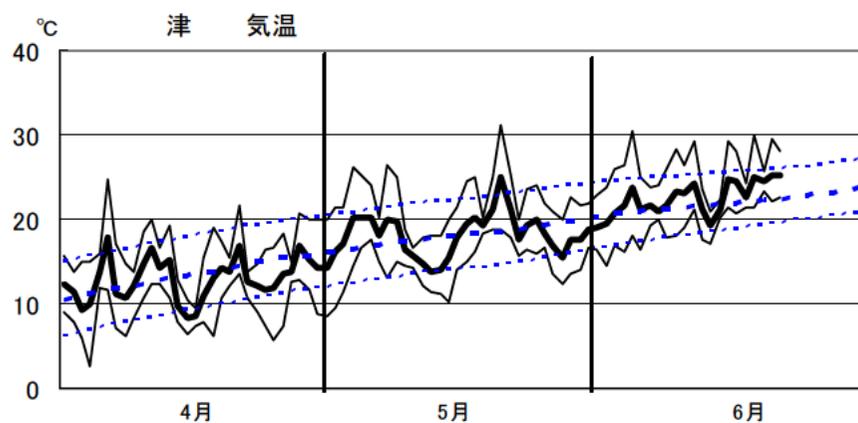
1週目 6月19日～25日	梅雨前線や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が続くでしょう。	晴れ日数の平年値 約2日
2週目 6月26日～7月2日	平年と同様に、梅雨前線や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多い見込みです。	同 約2日
3～4週目 7月3日～16日	平年と同様に、梅雨前線や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多い見込みです。	同 約6日

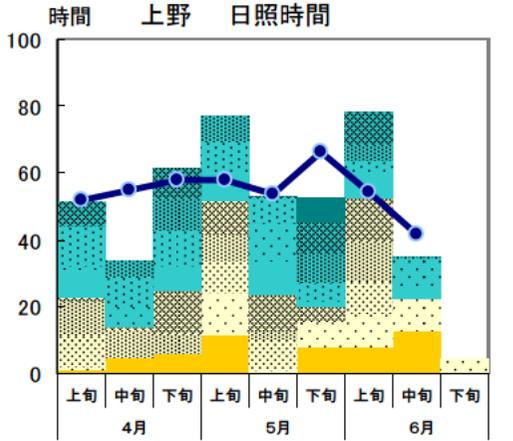
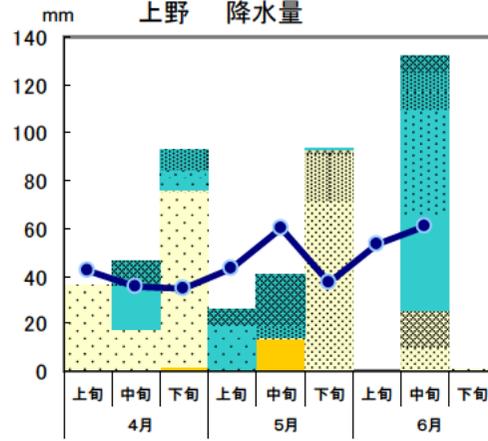
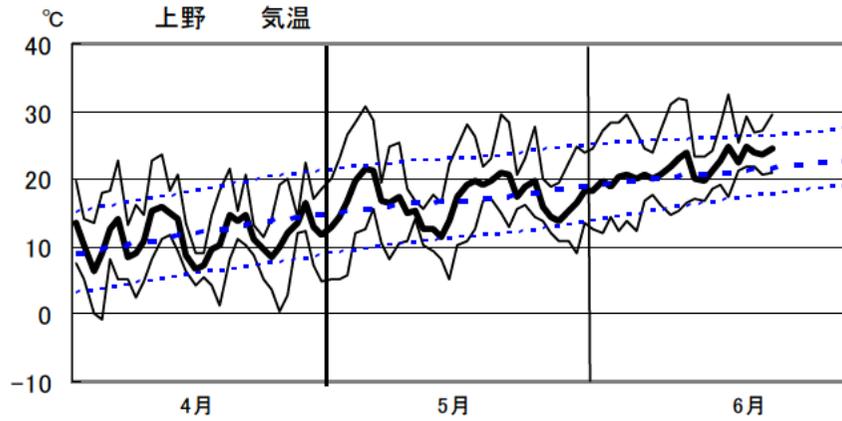
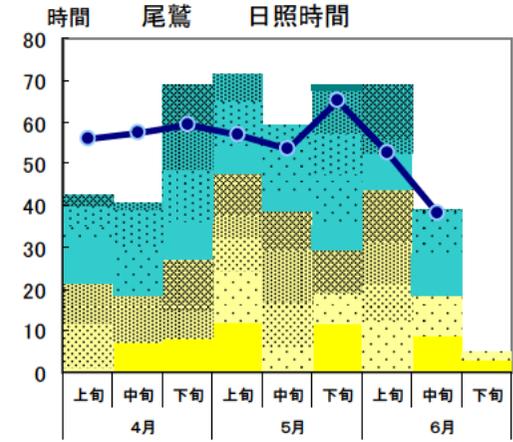
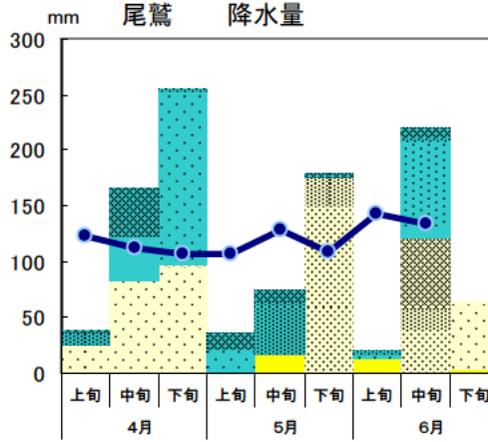
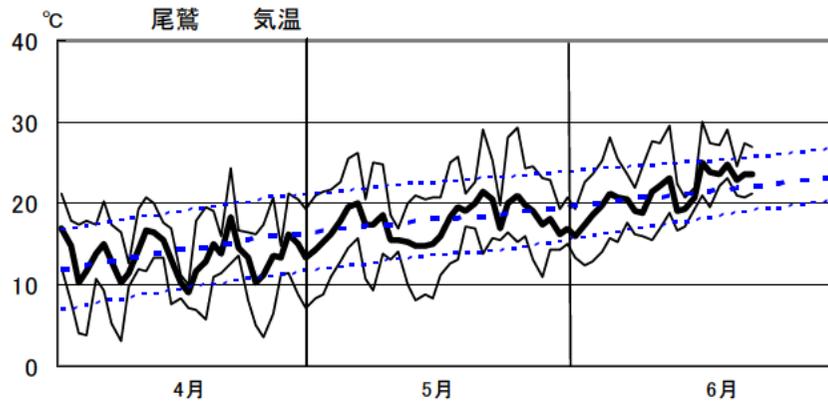
東海地方週間天気予報 (平成22年6月23日5時 名古屋地方気象台発表)

予報期間 6月23日～6月29日

向こう一週間は、気圧の谷や梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。最高気温と最低気温はともに、平年より高い見込みです。降水量は、平年並でしょう。

気象の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (6月22日まで)





凡例

- 平均
- 最高
- 最低
- - - 年平均
- - - 年最高
- - - 年最低

凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平均値

凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平均値

7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

本年度から、平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

- | | |
|---------------|---------------|
| 第1回 4月22日(済み) | 第2回 5月27日(済み) |
| 第3回 6月24日(今回) | 第4回 7月22日(木) |
| 第5回 8月26日(木) | 第6回 10月21日(木) |
| 第7回 3月17日(木) | |

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.jp/Bojyosyo/files/h22yohotebiki_.pdf

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報」

<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html>